筑波学院大学紀要第11集　147 ～ 155 ページ　　2016年

＜研究ノート＞

市町村博物館と高齢者

千葉　隆司*

Municipality Museum and Elderly Person

Takashi CHIBA *

高齢化社会が進行する中で、様々な問題が生じているが、筆者は、比較的に無縁と考えられがちな人文学的側面からも問題解決の糸口があるものと考える。

小論は、高齢化社会について、筆者が考え実践する博物館経営を基に、高齢化社会によって生ずる問題の解決の一端を模索したものである。

それは、高齢者が持つ知識と技術を活かした博物館事業、さらに博物館が蓄積する地域情報を高齢者の方々に活用していただき地域活性化を図るという博物館と高齢者との関係の構築によるものである。高齢者が持つ知識と技術は、日本文化の継承には重要な要素のため、それを引出し、活用していくこと、さらに博物館における高齢者との関係から発展するコミュニティを形成することで、高齢者の健康寿命の確保を図るのである。また、博物館に集積される地域情報は、地域に生活する高齢者にとって良きコミュニティ形成の素材となる。そして、博物館自身がコミュニティサロン的存在になるのである。これらを実現するには、日常的な地域密着型の活動が必要となるため市町村博物館の手腕が試されるものとなる。

このような、高齢者がいきいき元気で生活できる環境づくりは、悲観的になりがちな高齢化社会を変えることにもなり、さらには博物館からのシステム構築ということで、博物館の社会的位置付けも向上するものと考える。

キーワード：市町村博物館、高齢者、健康寿命、生涯学習、地域情報、地域コミュニティ、日本文化の継承

１．はじめに　少子高齢化の社会

総務省が発表する『高齢者白書』によると我が国の総人口は平成26（2014）年段階で、１億2,708万人で、65歳以上の高齢者人口は過去最高の3,300万人（前年3,190万人）となり、総人口に占める65歳以上人口の割合（高齢化率）は26.0％（前年25.1％）となったとされる。この状態が進めば、平成72（2060）年には高齢化率は39.9％に達し、2.5人に１人が65歳以上になるという。

現代社会は、まさに少子高齢化の渦中にある。その社会変化の速度は、対応すべく政策や事業が追い付かないほど急速で、少子高齢化ではなく子供が全くいない無子高齢化になりつつある地域も存在するようになってきて

＊　非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

いる。このような状況から生じる限界集落は地方の山間部などの現象に留まらず、比較的人口が多い関東地方にも想定されるものとなった。

高齢化の上、世界で有数の長寿社会となった我が国は、高齢者に対する医療や介護の面で様々な問題を抱えることとなり、これに対応する政策は長期的な展望が重要と考えるが、急速な変化に現在をどう乗り切るかに押される傾向にあるといえる。しかし、悲観的になることはない。高齢者が生き生き元気であり、多くの分野で活躍する環境が整えられ、健康寿命を延ばすことができれば、多くの問題が解決できる可能性があるのである。

高齢者が積み重ねてきた年輪は、代えがたい人生そのもので、次世代の人々が学ぶべき内容を含むと共に、高齢者の知識や身に付けた技術は、今後の素晴らしき日本を継承するための重要な要素といえる。また、年輪を重ねた高齢者自身も、さらなる学習・教育を受けることで第二、第三の人生をより良く過ごすことができるのである。

高齢者も日本の将来を左右する存在であると共に、困難な時代に活躍してほしい人材と言えるのである。

小論では、こうした高齢者の活動の機会や場に市町村博物館が大いに役立てられることを論じ、高齢者による新たな社会構造の変革の可能性を探ってみたいと思う。

２．高齢者について

まず、高齢者の位置づけについて、日本ではどのような変遷を経てきたかみてみよう。わが国では、戦前まで儒教を道徳的規範として学習・教育を行ってきた。すでに、継体朝には五経博士が来朝し、その後聖徳太子が、儒教の経典の一つであった『論語』の「学而」にある「礼の用は和を貴しと為す」を引用して、『憲法十七条』第一条の「和を以って貴しと為し･･･」を作成したように、古代には儒教思想が伝来し、普及し始めていた。儒教の根本教義では、父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の五倫が重んじられ、これらの関係を正しく保つことで、より良い社会が生まれるとしている。ここにある「長幼」とは、子供は大人を敬い、大人は子供を慈しむという関係を示したものであるが、この考え方が後の時代にも浸透し、一般化していったため、その後も大人、中でも年を重ねた高齢者は、家族や地域の中で尊敬され、権威をもつ存在として位置づけられていった。また、孝道や孝行といった父母や祖父母に仕える事も奨励され、孝道や孝行の手本となる人物の行動は伝承化されるものも多かった。霞ヶ浦湖畔の浜村（行方市）の孝子「弥作」の話は有名である。寛永年間に生まれた弥作は、早くに父を失い、足腰が悪く体が思うようにない母と２人で暮らしていた。生活は貧しかったが、母を思う心が篤かった弥作は、恩愛の情を常に持ちづつけ母親を労り、苦しみの中にも喜びをもって生活したのである。そのような弥作の話は、水戸藩二代藩主の徳川光圀の耳に入り、孝道の手本として国中に広められると共に褒美が与えられている。その他にも家族間における孝道や孝行の昔話は、数多くみられ、いかに日本人の歴史の中では、重んじられる行為であったかが分かる。このように歴史を紐解くと高齢者は、敬い、尊ばれる存在として家族、そして地域の中で位置づけられていたのである。

その後、欧米化による近代化を促進させた我が国は、産業革命による業績主義となった国々のように年齢階層による秩序を崩壊させていき、現代産業にみる大量生産･大量消費、コスト削減・合理化の流れの中で高齢者の地位を低下させる社会となったのである。経済重視の世相から展開する労働力の第一線から離れた人材の軽視である。さらに、農林水産業に代表される第一次産業の就労離れが進行

し、第二次・第三次産業への就労の意識変化は、第一次産業の中で重要視され、育まれてきた地域コミュニティを大きく変えるものとなり、加えて家族や地域の中の「知恵袋」や「生き字引」として重要な存在であった高齢者に対する位置づけを低下させ、高齢者との関係を少なくさせていったのである。

便利で豊かな輝かしい社会を持続させていくために人口減少社会、高齢化社会の行く末をどのように捉えるか、合わせて経済重視の社会の歪として現れたコミュニティの崩壊をどう改善していくか考えていくためにも、生産性をもつ若年層のみを重視する社会の見直しを図らなければならない。そのような状況に対応する一つの考え方として、退職者を再任用したりOB人材を活かした経営を実施する役所や企業がみられはじめている。

なぜ、歴史の中で高齢者が重要な存在として扱われてきたのか、それは生活する上で、仕事をする上で必要な多くの知恵をもち、経験を重ねた結果の技術を備えた存在であったからである。いわゆる地域に生きる中で手本となる存在であったのである。この考えは、現在も有効なものといえる。目まぐるしく変化した昭和時代に失われてしまった、或いは少なくなってしまった日本文化等にみられた知恵や技術を高齢者の方々は知り得ているため[1)]、それらを復活、継承するために重要な存在なのである。歴史に見る高齢者の位置付けや考え方に学ぶ必要があるといえる。

次に、高齢者自身の様相をみていくことにしよう。一昔前までの茨城県かすみがうら市の地域では、息子が嫁を貰ったとしても家督を親から譲られない限り、生計は同居する親が切り盛りしていた。しかし、家督を相続し、親が隠居の身になると息子夫婦が親を養う立場となり、老後は息子夫婦の主導権で家は動いていったのである。その後、家族の自立、個人化が進み、家族における高齢者の立場も自立せざるを得なくなっていった。まさに高齢者が第二の人生を自分で考え、実践する時代となったのである。

総務省が毎年発行する『高齢者白書』の平成26年度版によると、労働力人口総数6587万人の内に65歳以上の方は696万人となり、全体の10.6％に及ぶ。定年退職後も就業を求める方が増加している結果である。さらに高齢者の社会参加活動面をみても、何らかのグループ活動に参加したことがある60歳以上の高齢者は61％となり、20年前の状況と比べ18.7％も増加している。この背景には、健康寿命の延伸による就労や学習意欲の高まりがあるものと考えられる。つまり、高齢者は体力や能力を高め、活かす機会を求めているのである。その背景には、人生や生活そのものを充実させたいと望む声があるものと考えられる。

筆者が勤務する郷土資料館が所在するかすみがうら市は、例外に漏れることなく少子高齢化が進行する地域である。かすみがうら市は、茨城県南部にあり東京都心へ出るにも1時間半ほどのところに位置するが、自然が豊かにある地域である。人口動態は平成27年度に示されたデータによると「かすみがうら市の人口は、1995（平成７）年をピークに減少に転じ、2010（平成22）年には、43,553人となっているが、2025（平成37）年には、39,065人（平成22年度と比較し、10.3％･4,488人減）、2040（平成52）年には、33,095人（平成22年度と比較し、24％・10,458人減）」と推計さている。一方で、老年人口とされる65歳以上の人口は、2010（平成22）年は10,023人（市総人口の23.1％）、2025（平成37）年には、12,603人（市総人口の32.3％）、2040（平成52）年には、12,089人（市総人口の36.5％）となり、2015（平成27）年から数え25年後には10人に４人が老年人口になる可能性が高いとしている。かすみがうら市が平成27年３月に策定した「かすみがうら　いきいき長寿プラン（かすみがうら市高齢者福祉計画第６期

介護保険事業計画)」では、急速な高齢化社会に向け「高齢社会が進展するにしたがって、高齢者がいきいきと充実した高齢期を送るために、心身両面から健康の維持・増進を図り、健康寿命を延伸させることが重要な課題となっています。特に、要介護の状態になることや重度化を防止すること、また、認知症高齢者の増大に対応した対策の強化が求められます。」と健康寿命を重視する姿勢を示している。そして、健康寿命を延伸させるためにも介護予防策が重要とし、高齢者の社会参加・社会的役割を持つことが大切であると結ぶ。その施策の展開として、社会的活動の促進及び生涯学習の推進を挙げる。ここに博物館と高齢者をつなげる現代社会ならではの関係があると考える。

3．市町村博物館と高齢者

3．1　博物館と高齢者との関係

これまでは、博物館といえば、一部の興味・関心がある人が行く施設、あるいは時間に余裕がある人の利用する施設と言われることが多く、中でも高齢者の利用率が高い施設とみられてきた。事実、日本博物館協会「博物館総合調査報告書」(平成17年３月）によると、アンケート回答した2030館園のうち455館園(22.4％)が最も多い入館者として「高齢者」をあげ、この調査時からみて８年前の平成９年の調査と比較すると「高齢者」の比率が約８％も上昇したが、平成16年の調査より現在は10年以上も経過したため、更に高齢者の入館割合は増加しているものと考えられる。

日本博物館協会では、平成15年度に「博物館における高齢者を対象とした学習プログラムの開発」に伴い、博物館における高齢者対応の状況調査を行った。翌年には、高齢者の博物館に対する意見を見学者とボランティアの観点から調査している。さらに平成17年には、それまでの調査を踏まえ、博物館におけるボランティア活動の手引き、ボランティア活動参加者の心構えを作成した。この一連の事業の背景には、生涯学習の振興方策があり、それに関わる高齢者の社会的位置づけの再考が存在している。この様子をまとめた「博物館の望ましい姿シリーズ８　誰にもやさしい博物館づくり事業　高齢者対応」では、高齢者の生涯学習や活動の場として博物館のボランティアをあげ、諸外国に一般的にみられる公共への奉仕と捉える。高齢者が、社会貢献を生きがいとして捉える様相を追認したものとなった。

続いて日本博物館協会は、平成19年に高齢化社会における博物館の機能をまとめた「博物館の望ましい姿シリーズ11　誰にもやさしい博物館づくり事業　高齢者プログラム」を作成した。内容にある「１高齢社会における博物館の意義」では、高齢社会の現状と課題が示され、対策としての博物館の重要性が説かれている。続いて、「２博物館の高齢者対応の現状と課題」では、博物館側での高齢者に向けた視点や対応、高齢者側から見た博物館の実態等をアンケート結果を基に分析している。そして、「今後の取り組みへの提言」として６つの項目を示した。(Ⅰ）参加と生きがいの場として、(Ⅱ）ふれあいの場として、(Ⅲ）学びの場として、(Ⅳ）知の社会還元の場として、(Ⅴ）社会的役割を担う場として、(Ⅵ）生活の質を高める場として、である。この６つの項目は、高齢者の現状と将来像を的確に捉えたすばらしいものと考える。筆者も、これらを念頭に博物館経営が行えるよう心掛けている。しかし、大きな課題が残されているように思えてならない。博物館は、知の情報発信基地であるため、きっかけがあって関わりをもつことがあれば、リピーターやボランティア、さらに多くの博物館への見学など深く関わりをもつことにつながるものであるが、博物館に来ることなく、

関わらない方々が多い現状をどのようにするかが課題といえる[2)]。博物館に来館される方やボランティアを希望する方は、問題なく博物館側と個人側での需要と供給の関係が築けるが、問題はその他大勢の博物館に関わることなく人生を送る方々に、いかにして博物館を利用し、先述した６つの項目に関わっていただくかである。近年は、認知症高齢者のケアと認知症予防として「回想法」や「訪問型介入プログラム」等が、博物館と福祉施設等によって実施されるようになってきており、博物館へ関心を寄せる高齢者層の広がりがみられるようになってきた。こうした今までにない事業を他機関との連携やボランティア派遣で行ったりすることも大切であるが、地域で生活する介護や援助が不必要で比較的健康的に生活するたくさんの高齢者に向けた博物館経営も重要と考える。筆者の経験では、子供や高齢者は、特に身近なものごとであればあるほど興味・関心を示す場合が多く、それをきっかけに深く広い考え方に展開していく場合が多い。具体的には、全国各地にみられる有名な史跡・名勝から歴史を学習した時よりも自らが生活する郷土の歴史を学習した時の方が、さらなる知的欲求につながる可能性が高いのである。自らが生活する空間の情報は、素直に受け入れやすく、知識となった情報を基に現地確認することができ、現実的なリアルな情報として脳裏に焼き付けられる。さらに、隣人や知人などの会話の中で、そうした情報を話題にすることで地域情報の共有が図られ、どんどん蓄積される情報に意外となりやすい。小学生が実施する地域の調べ学習的な様相と同様である。つまり、高齢者自身が生活をする空間の物事や事象の個別な点が線となってストーリーや意味が見出されていく構図である。その構図作成へ導くシステムを構築するためにも、地域密着型の博物館経営を実施し、日々地域情報の収集と解析、そして地域住民との接点を多く持てるように心掛けていかねばならない。

３．２　生涯学習と市民学芸員

筆者が以前にまとめた『市町村博物館と生涯教育』（千葉　2013）で記したように、人間がより良く生き抜くため、さらには充実感をもって人生を全うするためには生涯教育が重要となる。それには、地域をフィールドとし、きめ細やかな事業を展開できる市町村博物館の役割が大きいものと紹介したのである。

筆者の「市町村博物館」を扱った研究ノートシリーズではお馴染みの市民学芸員制度であるが、登録し活動する年齢層は高齢者が圧倒的に多い。繰り返しになるが人生をより良くし、全うするためには生涯学習が重要と考えているため、筆者は生涯学習を目的とした教育普及事業に力を入れている。その代表事業としての市民学芸員制度は、それまでの人生の中で培われた知識と技術、さらに生涯学習による自己研鑽の上、身に付けた知識や技術を基に、社会貢献していく流れをつくり、こうした流れを次世代へ引き継ぎ、将来的に持続していくことで、すばらしき人生を誰もが形成でき、地域社会の元気力を高めるシステムを形成している。

大人は、自らの人生の中で経験した様々な事象を基に、初めての経験でもある程度臨機応変に対応することができる。そのために、生涯学習として受け入れていく初めての情報にも自らの経験からの咀嚼がある。しかも、その情報が自分のとって身近なもので、取り入れやすいものであればあるほど、咀嚼を通じ次のステップへ進み、そして応用及び発展させることができ、第二の人生へ生かせることができるのである。市民学芸員制度で新たに身に付ける情報は、自らが生活する空間、郷土の情報である。意外にも、現代社会では人生の中で郷土の情報を知り得る機会は少なく、意識を傾ける機会も少ない。そのために第二の人生のきっかけとして郷土の情報を身

に付けることによって、ここに生活する者にとって郷土とは何か、自分は郷土で何をすべきか、貢献できることはあるかなどの意識が芽生えることとなるのである。第二の人生を歩み始めた高齢者は、こうした機会を潜在的に待ち望んでいる場合が多い[3)]。

筆者は、市民学芸員に所属する高齢者の方々の実状と課題を探るべく、アンケートを実施してみた。市民学芸員は平成27年度で約30名の方が会員となっているが、常時活動に参加する方々は約半数となるためアンケート回答は少数ではあるが、13名（50代が１人、60代が４人、70代が８人）である。以下、その結果と分析した内容を記してみたいと思う。

アンケートの内容は、生涯学習的要素と医療や福祉的要素の２つを問うものとした。まず、市民学芸員に入会しようとしとしたきっかけの問いでは、「興味があったので」、「友人に誘われて」という回答が多かった。市民学芸員になるためには、郷土資料館講座の「市民学芸員養成講座（考古・歴史・民俗・自然・観光の５回講座）」[4)] を受講しなければならないが、こうした講座に参加しようとする意欲が入会の動機にあるようである。そこには向学心があり、それを実行しようとする行動力もあることが分かる[5)]。市民学芸員の活動に対しての問いには、「非常に楽しい」、「楽しい」が過半数を占め、市民学芸員に入会してよかったことの問いには、「新しい知識の獲得」や「多くの人々との交流」が多くみられた。楽しみながら学び、新たな地域コミュニティを形成して、目的を同じとする人と活動する、このシステムが非常に心地良いようである。市民学芸員となって変化したことの問いには、「歴史をはじめとした地域の魅力に関心をもつようになった」、「さらに詳しく調べたいと思った」、「郷土のすばらしさを話せるようになった」など、今まで知る事のなかった地域情報を得たことにより、発展的な考え方や行動につながっていく様子が窺えた。続いて、医療・福祉の面で市民学芸員となってからの健康面での変化の問いには、特段自覚症状を得る人は少ないようであったが、体力が付いたと感じる人は多いようである。市民学芸員の活動は、史跡めぐり講座やガイドボランティア、各部会の調査など野外活動も多く、時には山刈りや清掃活動など普段使うことの少ない筋肉の運動や持久力を求められる運動もあるため、疲労を生じさせ、苦しさを伴うこともあるが、体力増進となっているようである。さらに、その活動を実施したことにより多くの方々から喜びや感謝の気持ちを表されるため、充実感や満足感も合わさり、総合的健康へも導かれていることが分かる[6)]。若年層との関わりの問いでは、関わりをもつことで元気になるという自覚症状をもつ方が過半数を占め、異なる年齢層、特に子供との交流が気持ちを前向きにさせることに繋がっているようである。高齢者と子供の世代間交流については、多くの研究者や機関でとりあげられ、高齢者については主観的健康度（自分自身の健康状態を本人が自己評価すること）に影響するものと考えられている[7)]。市民学芸員による小学生対象の展示解説や出前授業、昔の遊びやその製作などの体験教室は、大変好評を得るものであり、後日に郵送されてくる子供たち一人一人の感想文は、市民学芸員の方々への励みになると共に確かに主観的健康度を高める要素、そして生きがいに繋がっていることが分かる。新知識を学ぶことで脳が活性化されていると感じるかとの問いでは、ほとんどの方が活性化されていると感じている。他分野にわたる生涯学習は、高齢者において脳の活性化が図れるものとされており、これに加え異年齢層との関わりによる脳の活性化は、高齢者に実施される回想法の効果と同様になるものと考えている。日本回想療法学会では「子供の頃の記憶」を思い出し、楽しくおしゃべりすることで認知症予防・介護予防になるとしている[8)]。

確かに、市民学芸員の方々は、小学生をはじめ幅広い年齢層、地域を異にした日々の不特定多数の方々とのコミュニケーションや解説ガイドなどの会話を重視する活動は、日に日に進歩するものがあり、より楽しんでもらおうとする向上心が生まれてきている。脳が活性化され、鍛えられている証と感じる。さらに、市民学芸員の活動が健康寿命を延ばすために役立てられていると思うかの問いには、ほとんどの方が思うと回答しており元気で健康にいられるために影響をもつ活動が、市民学芸員の活動にはあると思われる。

市民学芸員は、同じ市内に生活するが関わりをもつことのなかった職種や地域の人々との出会いにはじまり、そうした人々との地域活性化という同じ目的をもった活動、そこに生じるコミュニティ、また新知識を得た上での異年齢層への教育的普及や他地域の人々との交流など脳と体の両方を適度に働かせる非常にバランスのとれた活動といえる。そして、「今日もおいしいお酒が飲める」、「ぐっすりと眠ることができる」、「孫との会話が楽しめる」など充実感あふれる日々の過ごし方ができるようになっているのである。

今回のアンケートでは、ほとんどの項目で市民学芸員として活動することが、個人にとってプラスに働いている結果がでており、市民学芸員制度が、高齢者の方が生きがいをもち充実した日々を送るための事例として評価できるものと考える。そして、健康寿命の延伸についても手助けができているものと感じる。今後も第二の人生を充実させ、地域の元気力の源となっていただく方を増やしていくためにも市民学芸員の活動に理解そして賛同していただける高齢者の方々を増加させていきたいと思う。

４．今後の市町村博物館の役割

平成27年10月から行政の効率化を目的の一つにマイナンバー制度が実施され始めた。改めて個人意識が進む時代であることを感じる。人間は、人と繋がる、関わる、そしてコミュニティによって正しく生きるために成長するものと筆者は考えているが、そうした関係が薄れ行く社会に進んでいる。個人主義が加速する今必要なことは、人と人を繋げて新たなコミュニティを作り上げる仲介者やまとめ役の存在、きっかけや機会などの時と場を提供するための環境整備と考える。

働く中で存在した組織や人間関係から解放された高齢者は、地域が生活空間の基本となる。自ずと高齢者は限られた空間や人間関係の生活となりやすく、究極には「独居老人」となることもあり、さみしい老後生活へと進みかねない。しかし、高齢者には、それまでの人生で蓄積されてきた数多くの知識や技術が存在するため、それを活かし、新情報を得ることで多くの方々と繋がり、コミュニティを形成することが可能となる。冒頭に記したが、高齢者の知識や技術は、これからの日本文化の継承には重要な要素である。より良い日本の未来社会のための学問である歴史・民俗学には、過去の情報が必要不可欠であり、高齢者によって得られる身近な一昔前の情報も重要なものと成り得る。高齢者がもつ能力を引き出し、活用するための仲介者となるのが博物館であり、そのシステムは新たなコミュニティ形成につながる。千葉県の野田市立博物館が実施する「市民のキャリアデザインの拠点」という考え方は、博物館と高齢者を結ぶ具体的な活動である。博物館の多種多様な要素の人々が日常的に集まる特性を活かし、それらの人々を展覧会や教育普及事業、そしてボランティア活動を通して繋がりを持たせ、関わりを持たせ、コミュニティを形成する。その材料として高齢者がもつ知識や技術、そして博物館に集積される数多くの身近な地域情報があり、博物館が人々の交流や活動の場となるのである。こうしたシステム

が、まさにキャリアデザインに有効となるのである。

企業戦士や会社人間と呼ばれ、がむしゃらに働くことを美徳としてきたサラリーマンが定年退職を迎え、それまでの会社関係のコミュニティから解き放たれ、家庭中心の生活に戻る中で、地域コミュニティの新構築に勤しむようになる。高齢者には、先述したように向学心や社会貢献を望む声が高く、仲介者やきっかけ、機会があれば活動し始める人は多い。そこに博物館の役割が発揮できるのである。高齢者の第二の人生を充実するための生涯学習、いわゆる向学心や社会貢献にこたえていくことを考えると博物館、中でも市町村博物館が重要な存在といえる。地域に密着し、地域情報を集積する市町村博物館は、自らが生活する郷土において最も身近で、関わりやすい存在である。地域情報を扱う市町村博物館によって実施される様々な事業は、単なる知識を得るのみのものでなく、そこに参加する地域の見知らぬ人々とのコミュニティ形成につながる。市町村博物館は、多くの異年齢及び異職業の人々を繋げるハブ的存在になることができる。このハブ的役割は、実際に知識の共有や人と人との交流から、多くの方が趣味の拡大や旅行、アルバイト仲間[9]へと様々な形で発展するものとなっている。

このように市町村博物館は、地域密着型の活動から多くの高齢者との関わりをもつことで博物館としての情報収集を進めることができると共に、高齢者の方々にとっても生涯学習の要素で、第二の人生に生きがいを見つけ、充実させることができるのである。高齢者との関わりを多くした博物館経営をすることによって、相互にメリットを生み出すことができる。市町村博物館のきめ細やかな地域情報の発信や日々の市民との関わりは、小論で示したように高齢者の生涯学習、そして福祉や医療分野にまで対応することができるのである。

市町村博物館の社会における役割は、その有効性を多様に示していくことで期待される存在に必ずなるはずである。そのためにも、どんどん博物館が持つ情報やネットワークを駆使し、社会に生ずる課題に積極的に関わり、博物館の目的や理念を通した解決策を目に見える状態で社会に示していかねばならない。中でも市町村博物館は、地域のニーズや課題を肌で感じ取ることができる特性を活かし、様々な分野への可能性を積極的に探っては、実践していかねばならない。そのような地に根ざした地道な努力と市民との協働作業を市町村博物館が進めていくことで、日本における博物館の位置付けが向上するものと信じ、筆者は今後も活動を続けていきたいと思う。

註　釈

1）現在の高齢者は、戦後から高度経済成長期、バブル期など目まぐるしく変化する社会を経験した方々である。そこには変化する日本文化があり、高齢者は古き良き日本と現代社会の日本の両方の知識や経験を持ち得る存在といえる。

2）文部科学省が公表した平成23年度社会教育調査の中の博物館調査では、平成22年度に年間開館した1243館では、合計122,831,000人の入館者があったと示している。さらに博物館事業に参加した方の人数を加えると合計126,427,000人となり、これを国民一人当たりの利用回数に換算すると0.99回とされる。

筆者が担当する大学での学芸員養成課程に学ぶ学生に対し、毎年実施している「博物館と学芸員に関するアンケート」では、博物館に年に１回あるいは、行かないと回答した学生がほとんどである。先の国民一人当たりの利用回数は、複数利用した方の数値がかなり含まれていると思われる。日本国民全体における博物館の位置づけ、認識そして利用はまだまだ低いのが現状といえる。

3）高齢者は現在では、前期高齢者と後期高齢者

に分けて考えられている。一般的には、年を重ねれば重ねるほど、健康や体力等に不安を抱く傾向にあるようになるので、積極的、向上的な行動は前期高齢者の方が高くなる。この意識が比較的に高い時期に、生涯学習をすることによって第二の人生の充実度が高まる流れを形成できる可能性は高い。市民学芸員との交流の中で筆者が感じることである。

4）市民学芸員の目的は、地域の魅力情報を共有し、地域の活性化策を考え、それを実行するリーダー育成である。市民学芸員の方に地域の魅力情報が多ければ多いほど、企画力の素材も多く持ち得ることとなり、活動の幅も広がりをみせるので、市民学芸員養成講座の修了者に対しては、郷土資料館で毎週土日に実施する講座や教室に参加していただき、更なる自己研鑽を勧めている。

5）あくまでも、かすみがうら市の市民学芸員の傾向に過ぎないが、その他の筆者の市民との交流の中にも知識を得ることや社会貢献について興味を示す方々が多いことを経験している。平成24年度に内閣府大臣官房政府広報室が実施した「生涯学習に関する世論調査」でも生涯学習について関心を寄せる人が多く存在する中で、実際に生涯学習を行った人は「学習が好きであったり、人生を豊かにするため」に行うと回答した人が多い。潜在的に向学心や行動力を持ち得ている人が多く、それらの人々はきっかけを探している場合が多いのである。

6）総合的健康は、アメリカの公衆医であったハルバート・ダン博士が提唱した身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態「ウェルネス」を言う（ハルバート・ダン　1961『ハイレベル　ウェルネス』）。

7）高齢者と子供の世代間交流については、林谷啓美・本庄美香　2012「高齢者と子供の日常交流に関する現状とあり方」の中で詳しく考察され、「高齢者と子供の交流に関する調査研究」園田学園女子大学論文集第46号にまとめられている。

8）特定非営利活動法人　日本回想療法学会『回想法とは？』パンフレットより

9）考古学の知識を得た方は、発掘調査にも興味が広がり、調査補助員として発掘調査に参加するようになっていく。そして関心を寄せた者同士が実施される発掘調査の情報を取り合うようになり、現場が終わると次の現場へと発掘調査アルバイトに関わるようになっている。

参考文献

1）日本放送出版会　1985『日本の条件17　高齢化社会』

2）香川正弘・三浦嘉久　2002『生涯学習の展開』ミネルヴァ書房

3）日本博物館協会　2005「博物館総合調査報告書」

4）日本博物館協会　2006「博物館の望ましい姿シリーズ８　誰にもやさしい博物館づくり事業　高齢者対応」

5）日本博物館協会　2007「博物館の望ましい姿シリーズ11　誰にもやさしい博物館づくり事業　高齢者プログラム」

6）文部科学省　2013「社会教育調査」

7）千葉隆司　2013「市町村博物館と生涯教育―地域社会からの人づくり―」『筑波学院大学紀要　第８集』筑波学院大学

8）総務省　2015『高齢者白書』